

特集 母なる川との対話——『メコン2030』にみる災厄と相克

特集にあたって

橋本 彩

映画『メコン2030』(2020年、94分)は、東南アジア大陸部のメコン川流域の5カ国の監督たちが、それぞれの国の文化を通して見つけたメコン川の10年後の姿を描いた次の5つの作品で構成されている。

- カンボジア「Soul River」(ソト・クリカー監督)
- ラオス「The Che Brother」(アニサイ・ケオラ監督)
- ミャンマー「The Forgotten Voices of the Mekong」
(サイ・ノー・カン監督)
- タイ「The Line」
(アノーチャ・スウィチャーゴーンボン監督)
- ベトナム「The Unseen River」
(ファム・ゴック・ラン監督)

報道関係者に配布された Press Kit によれば、舞台を2030年に設定されたこの映画の制作目的は、映画を観た観客が深刻なダメージを受けている環境に目を向け、自然環境を保護する活動に積極的に参加するよう観客の動機づけを行うことにある。こうした環境問題を重視する本作品は、メコン川の水資源管理や環境問題などと関わりの深いメコン川委員会(MRC)、Oxfam、The Asia Foundation、Heinrich Böll Stiftung Southeast Asiaの4団体がスポンサーとなっており、資金提供の他、監督たちに環境問題に関する情報提供も行ったようである。2019年末に完成した本作品は、2020年以降の現在も各国の映画祭などで上映されており、継続して注目度の高い作品である。

本特集では、京都大学東南アジア地域研究研究所 CIRAS センターの2020年度共同研究「東南アジア大陸部の災厄の文化誌——川をめぐる伝承・文芸を中心に」の研究対象の一部である本作品を取り上げ、共同研究員のうち、カンボジア、ラオス、タイを担当する3名がそれぞれの担当国の作品を読み解いている。



©Luang Prabang Film Festival

本共同研究の目的は、川およびそれに類することからの表象の事例を収集し、それらの表象がどのような時代背景や社会背景のもとで生み出され、どのような含意を持つかを検討するとともに、東南アジアの人々が社会の課題や災厄をどのように捉え、それが時代ごとにどのように変遷してきたかを明らかにすることである。

この目的に照らし、現在、中国の影響力が増し、水をめぐる国際的な環境保全と災害対応という今日的課題を抱えるメコン川流域国がその問題を日常生活レベルでどのように捉えて表象しようとしているのかについて、『メコン2030』を通じて考察する。